

中学生のキャリア教育プランについて －本埜村立本埜中学校での実践を通して－

吉村真理子

Career Counseling Junior High Schools :
Case Study of Motono Village Junior High School

Mariko YOSHIMURA

筆者が講師参加した本学近隣の本埜村立本埜中学校では、中1、2年生を対象とした体験型の職業・上級学校ガイダンス「夢の架け橋103プロジェクト」（103は全校生徒数）を実施し、昨年度に引き続き同校の要請を受けて、筆者が講師として参加した。開催場所は当中学校であり、各参加団体が中学校を訪問して行う出前授業の形式である。そのプログラムの一部である体験型の職業・上級学校ガイダンスについての利点、改善点を考察する。

1 問題と目的

1. キャリア教育の意義と役割

(1) 背景

①社会の変化とこれまでの文部科学省等の取り組み

近年の産業・経済の構造的変化や、雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず児童生徒の進路をめぐる環境は大きく変化している。厚生労働省の「平成16年版労働経済の分析」（2003）によると、フリーター数は217万人、「ニート（Not in Education, Employment or Trainig）」と呼ばれる「求職活動を行っていない15～34歳のうち、卒業者、未婚者で、家事や通学をしていない者」の数も52万人にのぼり、これらの増加傾向は、いうまでもなく経済成長の抑制原因となることを指摘している。

このような背景の中、児童・生徒が「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面する様々な課題を柔軟にかつ、たくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育が強く求められている。

また、遡ってさらに、2004年1月に出されたキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書「児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観をそだてるために」

では、キャリア教育が求められる背景として、精神的・社会的自立が遅れ、人間関係をうまく築くことができない、自分で意志決定ができない、自己肯定感を持ってない、将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしないなどの「子どもたちの生活・意識の変容」を挙げている。さらに、高等教育機関への進学割合の上昇等に伴い、いわゆるモラトリアム傾向が強くなり、進学も就職もしようとしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加も指摘している。

このような流れのなかで、平成15年、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の関係四閣僚により、教育・雇用・産業政策の連携強化等、総合的な人材対策として「若者自立・挑戦プラン」が策定された。このプランでは、キャリア教育の推進が大きな柱の一つとして位置づけられており、文部科学省では、関係府省と連携を図りながら、義務教育段階からの組織的・系統的なキャリア教育の推進やインターンシップなどの職業体験の促進、フリーターへの再教育の実施など、教育の面から若年者雇用問題に取り組むことを示した。

その後、平成17年には、上記4大臣に新たに内閣官房長官が加わり、「若者自立・挑戦プランの強化の基本的方向」並びに「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」がまとめられた。小・中・高校において、関係府省が密接に連携し、産業界の最大限の協力を得つつ、中学校を中心に、5日間以上の職場体験の実施などを通じ、学校段階からのキャリア教育を推進すると共に、キャリア教育に係わる事業の効果的な実施を図るため、学校、PTA、各教育委員会、各労働局、ハローワーク、各経済産業局、地方公共団体、地域の商工会議所等による地域レベルでの協議の場を設けるなど、関係機関等の連携、協力による支援システム作りに取り組んでいる。さらに、文部科学省では、現在、小学校段階からのキャリア教育の一層の推進に取り組んでいるところである。

また、政府の「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2005」や日本経済団体連合会会長が議長を務める「若者の人間力を高めるための国民宣言」においても、若者が生きる自信と力をつける社会を実現するため、社会に出る前に職場見学や職場体験・インターンシップを推進することが基本方針として盛り込まれている。

文部科学省においても、初等中等教育におけるキャリア教育の在り方について、学識経験者や経済団体関係者、学校教員等で構成される協力者会議を設け、平成16年に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」を公表した。特に、職場体験やインターンシップなどの体験活動には、勤労観・職業観の育成、学ぶことへの意義の理解と学習意欲の向上等様々な教育的効果が期待され、現実立脚した確かな認識を育む上で欠かすことのできないものであるとされている。

中学生のキャリア教育プランについて～本埜村立本埜中学校での実践を通して～

これらを踏まえ、文部科学省では、平成17年度から、中学生を中心に5日間以上の職場体験とその支援体制を整備するための「キャリア・スタート・ウィーク」を全国138地域で実施している。国立教育政策研究所生徒指導研究センターの調査によると、平成16年度の時点で、公立中学校の約90パーセントで職場体験が実施されていたが、その実施期間の多くは1～3日となっていた。文部科学省では、既に5日間の職場体験を行っている先進地域で、学校、家庭、保護者等の各方面から多くの成果があがっているとの報告があることなどから、地域の実情を踏まえつつ、5日間以上の職場体験を実施することが望ましいと考え、「キャリア・スタート・ウィーク」における中学校での職場体験の期間を5日間以上とした。

学校においては、職場体験の実施に向けて、明確な目標のもとに期間・内容、教育課程への位置付け等を定め、受入企業・事業所等との共通理解を図りながら、職場体験を行うことが重要である。それと同時に、事前指導・事後指導において、職場体験が一過性の活動とならないよう留意し、取り組みを一層進める必要がある。

（2）「キャリア教育」とは

キャリア教育とは、「児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」とらえられ、端的には「児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てる教育」と定義づけられている〔キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）〕。

（3）教育課程上の位置づけ

キャリア教育は、学校の教育活動を通じて、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的・系統的なキャリア教育の推進が必要であるとしている。〔キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）〕。

1999年12月に出された、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においては、学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るため、キャリア教育の導入を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があるとしている。

総合的な学習の時間は、各学校が「地域や学校、児童生徒の実態等に応じて横断的・総合的な学習や、児童生徒の興味関心等に基づく学習など、創意工夫を生かした教育活動を行う」ことができるようにするために創設された。

「キャリア教育」は、上述のように、その実施が求められている極めて今日的な教育課題であり、総合的な学習の時間において、これに関する内容を取り上げることは大変有意義であると考えられる。

現中学校学習指導要領における進路及び職業に関する記述としては、第1章「総則」に

書かれた「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として、「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」「生徒が学校や学級での生活により良く適応するとともに、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるように、学校教育活動全体を通じ、ガイダンスの機能の充実を図ること」、また第4章「特別活動」の内容として「将来の生き方と進路の適切な選択に関すること」として、「進路適性の吟味と進路情報の活用、望ましい職業観・勤労観の形成、主体的な進路の選択と将来設計など」を挙げている。

（４）本埜村立本埜中学校の取り組みと筆者の関わり

今年度も本学近隣の本埜村立本埜中学校が、中1、2年生を対象とした体験型の職業・上級学校ガイダンス「夢の架け橋103プロジェクト」（103は全校生徒数）を実施し、昨年度に引き続き同校の要請を受けて、筆者が講師として参加した。開催場所は当中学校であり、各参加団体が中学校を訪問して行う出前授業の形式である。前掲の報告書は、キャリア教育を推進するための条件整備の1つとして、関係機関等の連携と社会全体の理解促進を求めているが、近年、本学にも、小学校・幼稚園教諭、保育士に関する職業紹介等の依頼が増えてきている。

本事業の目的は、生徒が、専門学校や大学、企業による講義や実技指導を受講し、かつ直接体験することで、職業に対する認識を高め、将来の職業選択についての興味・関心をもつようになること、さらに、将来の職業についての視野を広げ、自己の生き方や進路について主体的に考えようとする意欲をもつようになることである。校長先生と参加講師との打ち合わせの中では、「白鳥の飛来地として有名な田園風景の中に融け込んでいる子どもたちの心に大きな揺さぶりをかけたい」との思いが語られた。

体験学習は「楽しかった、面白かった」というような一時的、非日常的な感想だけに終わらせず、体験後の生活に変化をもたらすようなものとしなければならない。そのためには、知的好奇心を刺激する学習内容を用意すること、何らかの心動かされる機会を与えること、現在の生活が将来の夢につながっているのだという実感を得られることが必要であると考えます。

体験学習の成否は、当日の実践のみならず、その事前・事後指導が鍵を握っている。事前指導によって職場をとらえる視点を養い、事後指導によって実体験の感動を職業観・勤労観にまで深化させることが重要であるといえよう。本事業では、1年次1月に、希望職種についての講義を受講する。その事前指導として「本プロジェクトの趣旨説明」「受講したい学校・企業についてのアンケート・受講講座の発表・リーダーの決定」等がある。また、事後指導としては、講師への「礼状作成」という形で受講感想をまとめて

いる。さらに、2年次11月に職業体験を行っている。希望職種についての講義受講は、職業体験後の2年次1月にも再度体験する。

II 結果と考察

1. 講義内容

筆者が紹介した職業は、「小学校・幼稚園教諭，保育士」であり，他参加団体の紹介した職種は，テニス・プレイヤー，トリマー，看護師，航空整備士，フライト・アテンダント，テレビ・レポーター，技術系企業であった。

実際の小学校・幼稚園教諭，保育士が自らの職業について語る文章を資料として職業紹介を行い，特に希望の多かった幼稚園教諭や保育士にとって必要な学習の一部として，視聴覚教材を用い，「発達心理学」の模擬講義を行った。

「赤ちゃんを知ろう！」というタイトルで，新生児には生き延びていくために必要なものとして，さまざまな原始反射（口唇探索反射，吸綴反射，把握反射，モロー反射など）が先天的に備わっていること，乳児は自分の手を動かしながらじっと見つめるハンドリガードや指しゃぶりなど身体感覚・運動を通して知能を発達させていくこと，乳児があやしてくれる人の顔に対して表出する社会的微笑，赤ちゃん独特の言葉である泣きや喃語等は周囲からの働きかけを引き出す働きがあり，乳児はそれに応答してもらうことで基本的信頼感を育んでいること，一見マイナスに思える人見知りも実は親との愛着がしっかりできている証拠であること，母親の表情から母親の感情を読み取り自分の行動を決定していくことが可能であること等を，VTR資料を視聴させながら説明した。

さらに，実技として「新生児サイズの沐浴人形を使用しての抱っこ体験」と，生徒になじみのある「3びきのこぶた」のイギリス民話版（ビッグ絵本）を使用して，読み聞かせを行った。

当日受講する際に生徒が記入する学習ノート項目には，「学んだこと，感銘を受けたこと，自分に生かしたいこと」等があり，生徒はその記載をもとに，受講感想をまとめている。

2. 実施後の考察

提出された礼状（受講感想）のうちのいくつかを，将来の志望別に，以下に掲載してみる。

誤字脱字は訂正してあるが，なるべく原文のままを記載する。

①小学校教諭志望

・1年女子（A.Tさん）

私は，小学校の先生に憧れていて「絶対に小学校の先生になる！」と心に誓いま

した。なので、今日でなるためにどうしたらいいとか子どもへの接し方とかいろいろ聞いて、またさらに「ヨシ！勉強をいっぱいして小学校の先生になる！」と勇気がわいてきました、でも、私は最初やってみたいと思ってたけど、学んだこととして、やりたいだけではダメ！ということがわかって改めて実感しました。私はなるまでの目標を考えました。「1、誰かが悪いことをしたら必ず注意すること。2、夢をどんなことがあってもあきらめない」です。自分で決めた目標を守っていきたいです。今日は本当にありがとうございました。

・1年男子 (M.Nくん)

今日は、先生という職業についてや子育ての仕方など、いろいろと教えて下さりありがとうございました。将来の夢は先生（小学校）なので、どうやって教員免許をとるのかや、子どもとの接し方がわかって良かったです。僕ももっと勉強して、いい高校に入って大学へ行って先生になることを目標にして頑張りたいと思います。そして、もし先生になれば、子どもとの接し方も今日のことを思い出していきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

②幼稚園教諭・保育士志望

・2年女子 (N.Oさん)

私は、昨年も講義を受けさせていただきましたが、前回とは違い、絵本の読み聞かせなどがあり、とても楽しかったです。絵本は、私がいつも見ているサイズの2倍位の大きさに、びっくりしました。私の今の将来就きたいと思っている職業は、幼稚園の先生です。しかし、これから先にいろいろな職業を調べ、希望が変わるかもしれませんが、今日の講義を参考にし、これからのことを考えていきたいと思いました。今日はいろいろとありがとうございました

・1年男子 (T.Sくん)

僕はまだ小学校や幼稚園の先生になろうと思ってるわけじゃないけど、どういうことをするのかなあと思って選びました。先生というと勉強を教えてるだけかと前までは思っていたけど、そうじゃなくて、クラスの1人ひとりの気持ちになってわかり合う。先生と子どもたちはお互いに尊敬し合う関係でなければいけないということを知りました。赤ちゃんの抱き方や成長（発達）の記録なども丁寧に教えていただきありがとうございました。来年職業体験で小学校や幼稚園に行ったときは、ぜひ役立てようと思います。

まとめてみると、「優しいだけではだめで、してはいけないことは子どもの目の高さで目を見てしっかり伝える」「子どもは1人ひとりみんな違う」「先生はみんな笑顔が大切」「赤ちゃんの行動1つ1つには意味がある」といった筆者が講義中に伝えたメッセージを

しっかり受け止めてくれていることに、驚きと感心と喜びとを感じた。

このような体験型ガイダンスは、すなわち「啓発的経験」となっているといえよう。キャリア教育における「啓発的経験」とは、「exploratory experience」の邦訳であり、「生徒がいろいろな体験を通して、自己の適性や興味などを確かめ、具体的な進路情報の獲得に役立つ諸経験の総称である」と定義されている（文部省,1974）。すなわち、生徒が直接五感を通してさまざまなことを得る「体験」という行為が、物の見方や考え方が形成される「経験」にまで高められ得ることを意味している。「exploratory」には、本来、探索的という意味があるが、生徒が体験活動に取り組む際の基本的態度として探索的であることが必要であるともいえよう。

III 今後の課題

プロジェクトへの講師参加を通し、事前に希望職種について調べ学習を行い、予備知識を得ておき、疑問点を明確にしておく「職業理解」、自分の個性や適性を考える「自己理解」の2つの分野を事前学習に加えることで、本事業の取り組みを更に深化させることを提案させていただいた。

まず、「職業理解」については、「なるにはブックス」（ぺりかん社）をはじめとする、職業についてわかりやすく説明・紹介している文献の他、現代の中・高校生にとって身近な情報収集ツールとなるのが、インターネットであろう。「通信利用動向調査」（総務省,2001）によれば、13歳から19歳のインターネット利用率は、72.8%となっている。物心ついた頃からパソコンやゲーム機に親しみ、携帯電話を使いこなしている彼らは、情報収集のための操作能力にはたけているといえよう。しかし、進路学習のための情報は、「探索→収集→整理→活用」のプロセスを経て、はじめて学習材料となりうるのである。教師は、「自分の興味と照らしどのような情報を探索するのか」「情報収集の際、正確な情報を収集するにはどうしたらよいか」「情報をどのように整理し、活用するか」などを、生徒に適時助言していくことが肝要である。

つづいて、「自己理解」とは、自分の能力・適性、興味・関心などについての理解を深めることであり、ホランド（Holland,J.L.）の職業的パーソナリティ理論が参考になる。この理論は、6つのパーソナリティ・タイプの頭文字をとってRIASEC（リアセック）とも呼ばれており、各タイプの特徴や職業例は以下の通りである。現実的(Realistic)：物、機械または動物などを対象とする具体的で実際的な仕事（役割）ex.動植物管理，工学系関連，機会の管理・運営，手工業・生産技術など。研究的(Investigative)：研究や調査などにより未知なことを明らかにしようとする仕事（役割）ex.自然科学，情報管理，社会調査研究，医学など。芸術的(Artistic)：独創的で美的感覚を求められる仕事（役割）ex.美術工芸，音楽，デザイン，舞踊，文芸，演劇など。社会的(Social)：人に接したり奉仕

したりする対人関係を通して行う仕事（役割）ex.社会福祉，教育，医療保険，販売，サービスなど。企業的（Enterprising）：企画や組織運営，経営などリーダーシップを求められる仕事（役割）ex.経営管理，営業，報道，宣伝など。慣習的(Conventional)：方法が決められた事柄を着実にこなし成果が認められる仕事（役割）ex.経理，ジム，警備，法務，編集，構成など。どの仕事にも多かれ少なかれ存在する6つのパーソナリティ・タイプの志向性を測定するテストが，職業レディネステスト（Vocational Readiness Test）である。

このホランドの職業的パーソナリティ理論を中学生に提示する場合には，文化祭において自分の希望する役割を例にとり1つあるいは複数を選択させると理解しやすい。各6タイプに沿った役割は以下の通りである。R：入場門を組み立て，用具の準備をする。I：他校における文化祭の様子を知るために，プログラムを集め，インターネットで調査する。A：パネルに絵を描き，当日に流す音楽などの曲目を考える。S：外部からの来場者の受付や案内を行う。E：実行委員として企画を考え，実行していく。C：物品貸し出しや，金銭の出納などを管理する。

これらの6タイプに関する質問紙に回答し，生徒が本来「興味」を持つタイプと，生徒が体験等によって形成された「自信」のあるタイプを決定する。例えば，あるタイプに対して興味はあるのに自信がないと言う場合，その生徒が，そのタイプに該当するような場面で「失敗した経験がある」か，「相対的にレベルが高い集団に属していた」というようなことが考えられる。もちろん，検査によって生じた自己理解に関する悩みや不安に対しては，必ずキャリア・カウンセリングの機会を持ち，安定した自己理解へとつなげていくことが重要である。

〈参考文献〉

- ・キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～」2004
- ・経済財政諮問会議「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2005」2005
- ・厚生労働省「平成16年版労働経済の分析」2003
- ・国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」2002
- ・社団法人雇用問題研究会「職業レディネス・テスト」
- ・中央教育審議会「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）」1999
- ・文部省「進路指導の手引き中学校学級担任編」1974
- ・文部科学省「中学校学習指導要領」1998

中学生のキャリア教育プランについて～本埜村立本埜中学校での実践を通して～

- ・ 文部科学省「中学校職場体験ガイド」 2004
- ・ 若者自立・挑戦戦略会議「若者自立・挑戦プラン」 2003
- ・ 若者自立・挑戦戦略会議「若者自立・挑戦プランの強化の基本的方向」 2005
- ・ 若者自立・挑戦戦略会議「『若者の自立・挑戦のためのアクションプラン』の強化」
2005